

第5回リンダウ・ノーベル賞受賞者会議(経済学関連分野)

所属機関・部局・職名: 高崎経済大学 地域政策学部 講師

氏名: 若林 隆久

1. ノーベル賞受賞者の講演を聴いて、どのような点が印象的だったか、どのような影響を受けたか、また自身の今後の研究活動にどのように生かしていきたいか。〔全体的な印象と併せて、特に印象に残ったノーベル賞受賞者の具体的な氏名(3名程度)を挙げ、記載してください。〕

ノーベル賞受賞者の講演を聴いてもっとも印象的であったのは、イノベーション、社会ネットワークをはじめとする社会(学)的な要素、心理(学)的な要素、脳科学の要素など、いわゆる新古典派的ではない要素に言及するノーベル賞受賞者が多かったことである。特に、印象に残ったのは Edmund S. Phelps 先生による「草の根からのイノベーション(grassroots innovation)」に関する講演や Alvin E. Roth 先生による「不快な取引(repugnant transactions)」に関する講演や Daniel L. McFadden 先生による「認知心理学・社会学・脳科学が消費者の選択行動に与える影響」に関する講演などである。経済学部出身ではあるものの経営学や社会ネットワークを専門分野とする自分にとっては、自分の研究分野に親和性の高いこれらのトピックが取り上げられていたことには大いに勇気づけられたし、非常に勉強になった。自分は個別の企業やその内部組織、消費者の行動を対象とする研究を行っているが、そのようなミクロな現象に着目した研究から得られた知見が産業全体や経済全体にどのような影響を及ぼすかというインプリケーションを考える上で、これらの講演は大変参考になった。ミクロな現象とマクロな現象の関連を探るという自分の問題意識・興味関心に沿った研究活動を行っていく上で、これらの講演内容を活かしていきたいと考えている。

その他で印象に残っている講演としては、Eric C. Maskin 先生による講演が挙げられる。David Ricardo の「比較優位の理論(Theory of comparative advantage)」に基づく予測に反して、国際的な取引が増えても発展途上国内の格差が縮まらずにむしろ拡大していることについて、なぜそのようなことになるのかをシンプルなモデルを用いながらわかりやすく説明していた。「比較優位の理論」は、自分が所属していた国際経営をひとつの大きな研究テーマとする東京大学経済学研究科経営専攻および東京大学ものづくり経営研究センターでもよく引き合いに出される馴染みのある理論であったが、非常にシンプルなモデルで既存の理論があてはまらない理由・可能性を示していくのはとても印象的であった。

自分の研究分野や問題関心を離れた講演の全般的な感想としては、多くのノーベル賞受賞者は自分がノーベル賞を受賞した研究の話ではなく、新たに関心を持っている研究内容・テーマについて話しているということが印象的であった。それなりに高齢なノーベル賞受賞者であっても(だからこそ?)、自分の好奇心や問題意識に従って新たなテーマに挑戦しているということはとても刺激になった。

2. ノーベル賞受賞者とのディスカッション、インフォーマルな交流(食事、休憩時間やボート・トリップ等での交流)の中で、どのような点が印象的だったか、どのような影響を受けたか、また自身の今後の研究活動にどのように生かしていきたいか。[全体的な印象と併せて、特に印象に残ったノーベル賞受賞者の具体的な氏名(3名程度)を挙げ、記載してください。]

リンダウ会議のホームページなどで事前には知っていたものの、ノーベル賞受賞者との距離が近く、時間や場所を選ばずに非常に気さくかつ熱心に若手研究者と会話してくれていたのが印象的であった。“EDUCATE. INSPIRE. CONNECT.”というリンダウ会議の基本思想を意識してか、昼食時やボート・トリップの際などにノーベル賞受賞者の方から積極的に参加者の方に接触しに来てくれるのは驚きであった。参加者も積極的にノーベル賞受賞者と会話し多くのことを学び取ろうとしており、非常に素晴らしい雰囲気形成されていた。

1日目のディスカッションはEdmund S. Phelps先生のものに参加した。その日のディナーでも同じテーブルに座り、2日目のScience Breakfastでもお話を伺った。ディスカッションの後に個別の質問にも快く応じてくれ、そのことをディナーの際にも覚えてくれていたことは印象的であった。

2日目のディスカッションはEric C. Maskin先生のものに参加した。Eric C. Maskin先生は今回参加したノーベル賞受賞者の中でも群を抜いて気さくな方であり、3日目のディナー(Bavarian Evening)の際に参加者とともにダンスを踊っていた唯一のノーベル賞受賞者であった。自分も含めミーハーな参加者にサインを求められても快く応じてくれていたのが印象的であった。

3日目のディスカッションはDaniel L. McFadden先生のものに参加し、その日のディナーでも同じテーブルに座った。ディスカッションの際に自分が少し論点の異なる質問をした時にも丁寧な対応をしてくれた。また、4日目のボート・トリップでは、マイナウ島に到着する少し前に自分たち日本人グループのところに来てくれ、それからマイナウ島で会場に着くまでの間、質問に答えたり他愛もない会話をしたりしてもらえた。その中でも印象的であったのは、「研究に対するモチベーションは何か?」という問いに対する回答が「好奇心である」というものであったことと、「研究と教育の両立についてどうすれば良いのか?」という問いに対する回答が「学生に講義をすることは自分をインスパイアしてくれる」というものであったことである。ありがちな質問ではあるものの、ノーベル賞受賞者に直接問いかけることができ回答をしてもらえたというのは貴重な体験であったと思う。

以上のようなノーベル賞受賞者とのディスカッションやインフォーマルな交流は研究活動に直結するような成果を生み出すものではないが、素晴らしい場で素晴らしい人たちと交流できたという体験は、今後の自分の研究をインスパイアしモチベートしてくれるものであると考えている。また、ノーベル賞受賞者の自分を含めた若手研究者への丁寧かつ親切な対応に触れたことは、自分が後輩や学生に対してどのように接すべきかを考える良い機会となった。

3. 諸外国の参加者とのディスカッション、インフォーマルな交流の中で、どのような点が印象的だったか、どのような影響を受けたか、また自身の今後の研究活動にどのように生かしていきたいか。

配布された冊子によれば、若手研究者だけでも80通りの国籍を持つ431人が参加している。これほど多様なバックグラウンドを持ったこれだけ大人数のほぼ同年代の若手研究者と交流する機会を持てたのは、非常に得難い経験であった。

“EDUCATE. INSPIRE. CONNECT.”というリンダウ会議の基本思想通りに、参加者同士でも積極的な交流が行われていたことは印象的であった。参加者の一員として会議を盛り上げていくという姿勢やこの貴重な機会を最大限に活かそうとする熱意が感じられた。多くの参加者が自分の研究について自ら語り、また、相手の研究や国や所属組織について積極的に尋ね傾聴するという姿勢は素晴らしいものであった。日本社会や日本経済についての意見を述べてくれる人もいれば、ディスカッションの場で自分が質問した内容を覚えていてそのトピックについてアドバイスをくれる人もいた。そのような環境で英語によるコミュニケーションの重要性を痛感する一方で、自分の決して上手とは言えない(はっきりとしまえば下手な)英語での説明を辛抱強く聴き会話してくれる姿勢は大変有り難かった。

参加者の予想以上の多様性も印象的であった。自分の専門分野は経営学であり経済学分野からは比較的遠いのだが、それでも興味関心が重なる研究者が何人もいることには驚いた。このことを考えると、あまり自分の専門分野にこだわらずにリンダウ会議に参加しても良いのかもしれない。また、日本からの参加者は博士課程の学生かそれより上の年代であったが、海外の参加者の中には修士課程の学生や(自分は会っていないが)学部学生も数多くいたようであった。かなり早い段階からリンダウ会議のような国際的な場に参加している若手研究者がいることを知り、驚くと共に大いに刺激になった。

以上のような参加者とのディスカッションやインフォーマルな交流から、各国の同年代の若手研究者が、強い問題意識を持ち、活発に研究活動を行い、国際的に交流していることを肌で感じることができ、自分の立ち位置、研究に対するモチベーション、これからすべきことを見直すことができた。

4. 日本からの参加者とのディスカッション、インフォーマルな交流の中で、どのような点が印象的だったか、どのような影響を受けたか、また自身の今後の研究活動にどのように生かしていきたいか。

現地に行くまでは、交流する対象としてノーベル賞受賞者や海外の若手研究者のことばかりが念頭にあったが、現地での日本からの参加者との交流は予想外に素晴らしいものであった。

日本からの参加者のうち同じような立場にある5人は会場からほど近い同じホテルに宿泊することになったが、(あまり日本人同士でかたまってしまうことに注意する必要があるものの)同じ国籍の参加者がいることは心強かった。研究やアカデミック・ポストに関する話からプライベートに関する話、果てはリンダウ会議に応募するまでの経緯や参加にあたって抱えていた不安に至るまで、様々な話を共有することができた。また、同じ日本からの参加者がノーベル賞受賞者や海外の若手研究者と積極的に交流しようとしている姿には勇気づけられ、自分がリンダウ会議で交流を進めていく上でも励みになった。

自分にとっては他の日本からの参加者と交流する機会を持てたことは特に大きな意味があった。というのも、自分は経済学部出身ではあるものの専門分野は経営学や社会学よりであるため、リンダウ会議のような長期間かつ交流が推奨される雰囲気の中でなければ経済学分野の若手研究者と「深く」交流する機会

はほとんどないからである。日本では経営学者が経済学者に比べてよりドメスティックであることもあり、同年代の日本の若手研究者が海外で活躍しようとしていることは大きな刺激となった。また、リンダウ会議の期間中にもいくつかの質問をさせてもらったが、隣接分野であり無関係ではない経済学に関する知識や考え方を教えてもらうことができた。自分の研究の質を高めたり幅を広げたりするためにも、日本からの参加者とは今後も交流を続けていきたいと考えている。

5. その他に、リンダウ会議への参加を通して得られた研究活動におけるメリット、具体的な研究交流の展望がもてた場合にはその予定等を記載すること。

共同研究のような具体的な研究交流の展望を持つことはできなかったが、リンダウ会議全般を通して得られた様々な知識や視点を自分の研究内容に活かしていきたいと考えている。自分の専門分野である経営学は、経済学と比較して個別の企業や産業といったよりミクロな側面に着目することが多い。自分の研究で得られた個別の企業や産業に関する知見が、産業全体や経済全体にどのような影響を及ぼすかというより大きな視点でのインプリケーションを考える上で、今回のリンダウ会議で獲得した知識や視点を活かしていきたい。その点、ノーベル賞受賞者の講演の中で、自分の研究分野に親和性の高いイノベーションや社会ネットワークをはじめとする社会学的なトピックが多く取り上げられていたことには大いに勇気づけられたし、とても勉強になった。

また、今回のような国際的な会議へ出席して多様なバックグラウンドの研究者と交流した経験を、今後自分が研究成果を海外で発表したり海外の研究者と交流したりしていく上で役立てていきたいと考えている。

6. リンダウ会議への参加を通して得られた以上の成果を今後どのように日本国内に還元できると思うか。

今回のリンダウ会議で得られた知識・経験・人的交流を活用してより多くのより質の高い研究成果を生み出していくことが、日本国内に成果を還元する王道ではないかと思う。

一方で、自分は既に大学で教鞭を執っていることもあり、リンダウ会議の経験を「教育」に活用することが、日本国内に成果を還元する別の方法なのではないかと考えている。リンダウ会議から得られたものを研究者の同僚や後輩に伝えていくことはもちろんである。しかし、リンダウ会議という国際的な場での経験から得られたものは、研究者だけでなく研究に関係のない一般の人にとっても示唆に富むものである。そこで、(既に講義やゼミを通して行っているが)主に自分が教えている学生を中心に、より幅広い人々へとリンダウ会議から得られた知識や気づきを伝えていきたいと考えている。

また、将来の参加者のために、リンダウ会議の存在やその内容・特色・意義を周知していくことも重要である。既に他分野の応募者に自身の経験を伝えているが、これからも情報を発信していくことで、リンダウ会議への応募・参加やリンダウ会議でより充実した経験をするための手助けをしていきたいと考えている。

7. 今後、リンダウ会議に参加を希望する者へのアドバイスやメッセージがあれば記載すること。

リンダウ会議は数多くのノーベル賞受賞者や世界中の若手研究者と触れ合えるという非常に貴重で刺激的な機会です。応募するかどうか迷っていたらまずは応募してみてください。英語でのコミュニケーションに対する不安や、最低でも1週間程度の期間を費やすという負担などで、躊躇してしまうかもしれませんが、参加してみればそのようなことはちっぽけなことであつたと思えるほど鮮烈な体験ができると思います。

実際に参加することになったら、時間・労力の制約はあると思いますが、できる限りの準備をしていくことを推奨します。全般的な英語の準備はもちろんですが、自分の研究をどのように伝えるか、日本の文化・社会・経済などの特徴や問題点、研究や各国の状況について他の参加者に聞いてみたいこと、など話す内容も準備しておく、よりリンダウ会議を充実したものにできると思います。また、参加する予定のノーベル賞受賞者についても下調べをしておく、講演やディスカッションをより意義深いものにできると思います。リンダウ会議の期間中は朝から晩までスケジュールが詰まっていたりなかなかハードですので、特に体調を崩しやすい海外の旅先ということもありますし、体調面にも気を遣っておいた方がいいでしょう。

と、色々なアドバイスを書いてはみましたが、これらはすべて自分ができなかったことです。4月に高崎経済大学に着任し、慣れぬ土地・職場での新生活に追われてリンダウ会議の準備はまったくできず、しかも、出発前にひどい風邪を引いてそのまま日本を発ちました。それでも、(いくつかのスケジュールをスキップする参加者も多い中)自分は全日程に無事参加できましたし、リンダウ会議を十二分に楽しみ、様々なものを得ることができました。準備をしっかりとした方がいいに決まっていますが、あまり気負い過ぎずにできる範囲で準備をすれば良いと思います。

最終的には、その場における積極性がものを言います。自分も会議に参加し盛り上げる一員であるという自覚を持って(お客さんにならずに)、積極的にノーベル賞受賞者や世界中の若手研究者と交流してください。特に、ノーベル賞受賞者の側は激戦区ですので、機会がきたら気後れせずに輪の中に飛び込むことが肝要です。